

# 《JCUE 論壇》

## 子どもの自然体験活動が求められる背景と海辺の指導者の課題

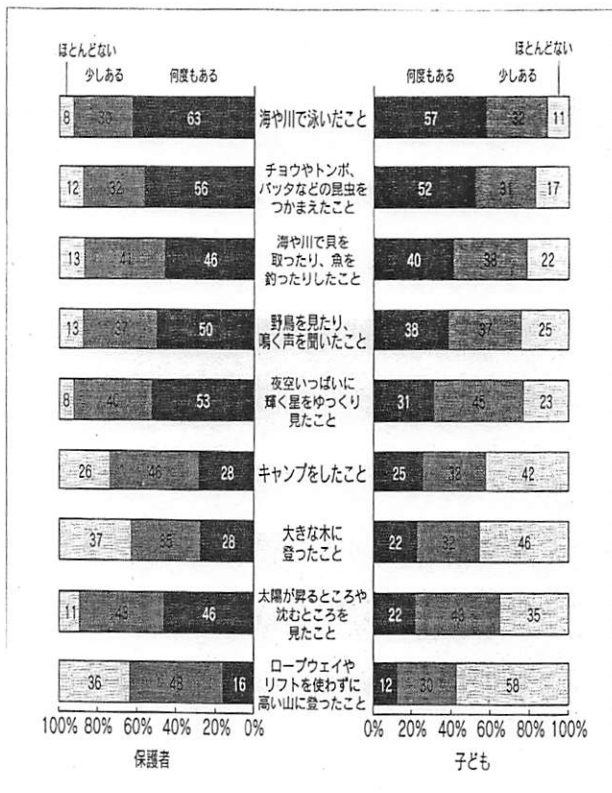
千足耕一（鹿屋体育大学・海洋スポーツセンター講師）

### 子供の遊び環境の変化

東京工業大学の仙田満先生が昭和30年から50年までの20年間に横浜の「遊び空間」を研究したところ、それが20分の1になっていたという記述があります。それからの20年間では、その減り方が半分であったという報告もされていますが、子どもの遊び空間というものが激変してきていることが窺えます。

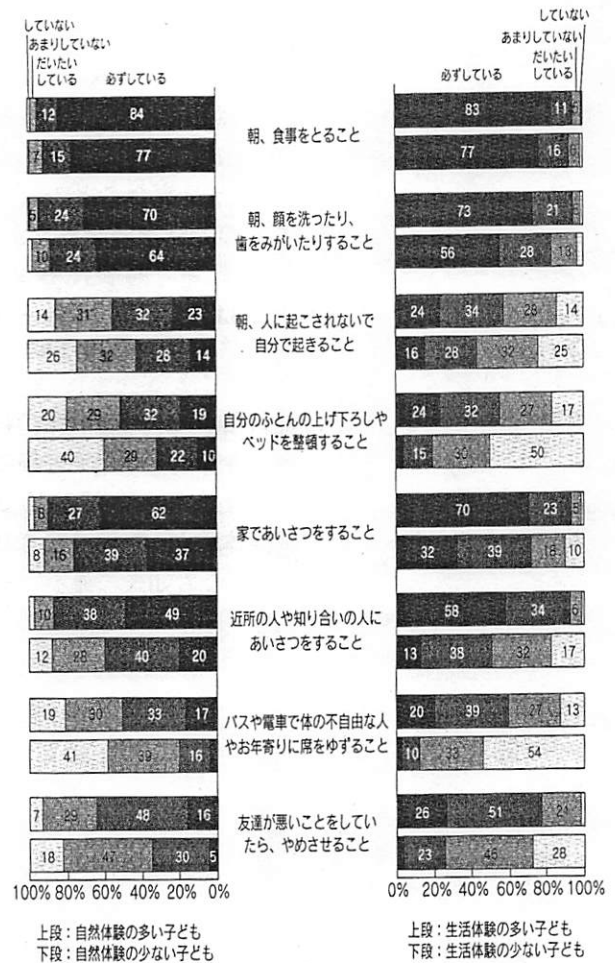
### 子供の体験活動に関するアンケート調査結果

文部省により平成10年7月に実施された全国11123組の小・中学生およびその保護者を対象とした調査データが、平成10年12月には、全ての新聞で取り上げられました（下図・参照）。



その中で強調されたことは、「保護者に比べて、子どもの自然体験が減少している」ことです。「夜空いっぱい輝く星をゆっくりと見たこと」がない子どもは4人に1人、「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」がほとんどない子どもは3人に1人等の結果が話題となりました。

そして、自然体験や生活体験の豊富な子どもと少ないグループを比較した結果、体験活動の多いグループほど強い道徳観や正義感を持つことも指摘されました（下図・参照）。このことに加えて、「テレビをよく見る子どもほど生活体験が少ない」ことも指摘されました。



この他、文部科学省（旧文部省）の自然体験に関する施策・記述・報告等には次のようなものがあります。平成8年中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方（第1次答申）」においては、「これからの教育は『ゆとり』の中で『生きる力』を育成することが重要である」とし「生きる力」を育むためには体験学習が重要であると強調されています。この直後の平成8年度に「青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議」による「青少年の野外教育

の充実について（報告）」が出されました。文部省が学識経験者や専門家の協力を得てとりまとめた初めての調査研究報告です。これらの報告や答申が現在様々な行政機関が積極的に体験活動に取り組むようになったことに影響していると考えられます。

最近では、平成12年10月に告示された「新学習指導要領」の中で、自然体験活動やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動などの体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れることが配慮事項としてあげられています。また、地域の実情に応じた自然体験活動を積極的に取り入れるべく「水辺活動」を明示しました。

同じように、平成11年6月の生涯学習審議会答申では「子どもたちの『生きる力』は学校での組織的・計画的な学習の他、家庭を含む地域社会で親子の触れ合い、友達との遊び、地域の人々との交流など、様々な体験や活動を通じて育まれる」という提言もなされています。

平成14年度から完全学校週5日制が導入され、家庭や地域社会での体験活動の提供が求められているというわけです。

### ダイビング・インストラクターができること

今年度(2003年度)、国土交通省が「海辺の自然体験」を全国各地で行い、多くのダイビング・インストラクターもその一翼を担ったことと思われます。また、JCUE(日本安全潜水教育協会)でも、夏にスノーケリングのイベントをボランティア開催したと聞いています。これらの体験活動を支えることが出来たことは、海の素晴らしさを伝え、ダイビングの裾野を拡大するためにも大変有効であったことと思われます。但し、行うだけでなく、これらを記録し、報告書として残していくことも必要だと思われます。また、参加者がどのような反応をして、どのような効果が残されたかを検討しなければなりません。

現在のところ、海辺で行われる体験の多くは、比較的短期間のものであり、比較的画一的なプログラムである可能性があるようにも思えます。キャンプの研究を引き合いに出しますと、キャンプでは生活への適応や有効な学習効果を得るためには、4日以上程度の日程が望ましいともいわれています。

短期的な海辺の体験活動が盛んに行われるようになった次のステップとして、長期にわたるプログラムが実施されるという段階が来るとも予想されます。

このような中で、様々なプログラムを実施するための力量を備えるべく指導者は準備をしておかなければならないと考えます。

さらに、事業を行う場合にはその実施期間が短期的なものあるいは長期的なものという違いはあっても、目標設定や方法・内容がリンクしていることと思います。もう一度、原点に戻って「何のために」その事業を行うのか、事業を通して「子ども達に何を伝えたいのか」ということについて特化して考える必要もあると思います。

### 今後の課題

子どもたちに「ダイビングや水遊びが出来る美しい自然環境を用意しておいてあげること」は、指導者だけでなく、社会全体の大人としての責任であるように思います。その自然を背景として、ダイビング指導者が実施する活動では、「潜る」とか「泳ぐ」といった活動だけではなく、ビーチクリーンアップや海辺の自然観察など、海の大切さ、楽しさ、奥深さや自然界のつながり等を意識できる活動も大切にしなければならないと考えています。

もちろん、ダイビングテクニックやリスクマネジメントを含めて、知識・技術を豊富にしていくことも大切です。このような意味からも、指導者は定期的に研修を積むことが必要ですし、これら研修活動に関する情報を交換しあえる仲間の存在は欠かせません。JCUEにはこのような役割も求められている気がします。

### 文献

文部省・青少年の野外教育推進全国会議実行委員会(1997)「平成9年度野外教育全国フォーラム」報告書  
野外教育指導研究会(1999)「野外教育指導者読本」  
文部省・国立磐梯青年の家(2000)自然体験活動担当教員講習会報告書